

## 東海伝統工芸展 木竹工・漆芸・諸工芸部門講評

公益財団法人古川知足会 古川美術館

主任学芸員 林奈美恵

東海伝統工芸展の木竹工、漆芸、諸工芸部門の一次審査を漆芸の鶴飼敏伸氏と諸工芸の池田貴普氏と、そして二次審査、賞候補を木竹工の川口清三氏とさせていただいた。

本年から招待作家枠がなくなり、ベテランも初出品者も肩を並べての審査であったが、やはりベテランの表現は素晴らしく、作家が慣習によって作品と向き合っていないことが作品から証明されたのも面白いことであった。

日本工芸会賞には安藤源一郎の『紙胎蒔醬嵐影合子』が受賞された。主題となったのは、豊田市の山深いところに工房を持つ作者が感じた山に漂う気である。山が見せる様々な表情を表現した作品であり、渦のように流れる美しい緑色の漆が風を、さらに金箔を施すことで木々の間から射す木漏れ日を感じる豊かな意匠であった。蓋の側面は上部と色調を変え、切り返しを設けることで、山が見せる激しい気と時折見せる静けさを感じさせている。この文様は、近年作者が集中して発表してきたシリーズであり、今回は合子にしたことで現代的な空間感覚と視覚的リズムが生まれたと思われる。安藤氏賞を受賞した馬淵弘幸の『神代杉木画箱』は緻密さと静謐さの漂う作品であった。無垢の色調を生かすことで、細かな技術をより強調させ、文様を浮かび上がらせており、素材の可能性を最大限に生かしていたことが印象的であった。蓋部の彫り繋ぎ文様には奥行きが感じられ、配置やバランスへ作者の意識が行き届いており視線の流れが心地よい作品であった。伝統奨励賞には若林雅子の『雨あがり蒔絵箱』が受賞された。能登で修業を積んだ作者の確実な技術が見られる作品である。今し

がたあがった雨のしずくが植物の葉先を潤し、その中を蝶が舞うという情景である。パターンデザインで表された葉は金と青金を使い分け、蝶は螺鈿を用いることで単調になりがちな文様にリズムを与えている。立体構造を生かしたシンメトリーの文様展開であり、両側から葉が茂り中央に向かっていくデザインと余白のバランスが作品に緊張感を与えている。初出品で印象的であったのが、久留則子の『櫛卵鉢』である。木目とフォルムの調和がとられており、作者の持って生まれたセンスの良さを感じられた。木目から受けるインスピレーションを大切にさらに技術を追求し、今後も活動してほしい。

尾張の産業として栄えた七宝の出品が少ないが、柴田明『有線七宝抽象文花器』と池田貴普『有線七宝花瓶－火炎－』は確実な技術と豊かな表現力、そして決して産業、民族的にはならない洗練された感覚が作品から感じられる。この表現が後世につなぐことを願ってやまない。また川口清三『黒柿茶箱』は素材の模様を十分に生かした優品であり、さらに驚いたのが、使い手に考慮した点であった。作者は「茶箱は蓋の上にお道具を置くこと」を考慮し、天板部分を便宜性を図るのみならず、傷が生じた際も削り直しができる施しがなされていた。「使う」ことに寄り添ったまさに用と美を兼ねそろえた作品であった。

今回の審査を通じ、漆芸、木竹工、諸工芸は作家がいかに素材と向き合うかが重要であると気付かされた。素材は工芸の本質的な土台である。その特性や性質に応じてどのような技術が使えるか、どんな形にするかというのは作家がもたらすものである。言い換えるならば、工芸の制限は素材であり、一方でそれは作家が加わることによって可能性へと変化すると私は考える。今後も作家の思考と素材の可能性が伝統工芸を支えていくのだろうという実感を抱き、今度の作家のさらなる向上を期待したい。